さて漢族が古來保守と同化の力とに於て他に比類なきまでに强盛であつたと主張しようとするならば、論者は先づ古來漢族は徹底的に自己本來の文化を固守し、他の如何なる文化に接してもこれを受容しないで、却つてこれを漢化して來たことを證明するのが順序でなければならぬ。然らざれば漢族の保守性が强烈で、その所有の文化を以て他を同化する力が然く强大であると見る說は成立しない。若し彼等が古來或る種の文化には却つて同化せられた事實ありとすれば、彼等は或る一面には自己を保持すること甚だ强いけれども、他の一面には必ずしも然らずと言ふべきであり、更にまた別の見解をも加へ得べきである。試に例を近時の支那に取つてこれを考察して見たらどうであらうか。近時特に民國以來、支那の文化の歐米化の甚しい有樣は何人もこれを否むものはないであらう。思想に於て、藝術に於て、科學に於て、風俗に於て、その他百般の文化現象に於てその顯著な歐米化は果してこれを以てしても尙ほ漢民族は固く保守主義を持して他の文化を受容せず、却つて他を漢化する同化作用の盛なる特徵を有する民族と斷じ得るであらうか。漢文化の根源ともいふべき儒敎の精神までもかなぐり捨て、一時孔廟の破壞、釋典の廢止にまでも進むだのではなかつたか。然も此の如きは近時に至つて始めて現はれた現象であつて、漢民族文化の一大變轉期に達したものといふべく、從來史上に嘗て認むるを得なかつた有樣であるといふものがあるかも知れない。然もこれも果してそうであらうか。

今一、二史上の事實を回顧して見よう。何時と定めるかは判然明らかでないにしても、漢代に於て既に疑もなく輸入せられてあつた印度發祥の文化なる佛敎は、漢民族の間に盛に歡迎せられ、六朝から唐代にかけて驚くべき發